

第二次世界大戦後の日本を分割占領から救った、スリランカ代表の「愛」の演説

今回、スリランカ訪問前にスリランカと日本の関係の歴史から、戦後の日本を分割統治から救うことになったスリランカ首相のサンフランシスコ講和条約の演説を知った。それは仏陀の教えに基づく愛の演説であった。



Gangaramaya temple (Buddhism) in Columbo、Sri Lanka: 2024.May

スリランカは、仏教徒のシンハリ族が8割ほどを占め、他にタメール族のヒンズー教徒が10%以上、その他イスラム教徒、キリスト教徒がいる。

仏教寺院を訪れると敬虔な仏教徒が多いことに圧倒された。

日本を救った演説、その中の仏様の教えを思い、感慨深く Gangaramaya 寺院を廻った。そしてアジア諸国が欧米列強の植民地支配から逃れたい、日本のように独立して欧米に負けない国になりたい、という気持ちが日本を助けてくれたのだと思った。

それにしても私の見聞だけでも以下のように日本が50か国以上と多くの国々と戦争していたことに驚く。

- ・ネパール山間地の山道で休んでいると、肩をつかまれて振り向くと、もとゴルカ兵だったという男が、にやっと笑い言った。「俺はビルマで日本兵と戦ったんだ」と。
- ・インドのホームステイ先で、ビルマからインドに日本軍が攻め込まないかヒヤヒヤしていたと聞いた。
- ・オーストラリアのシドニーで昔、老人に突然、ジャップと呼ばれとめられた。シドニーの博物館には日本軍が攻めて来た絵が大きく飾られていた。
- ・オーストラリア北西部に、日本軍が基地を作っていたという。
- ・サンフランシスコの海岸の崖の上に、日本軍が攻めて来ないか見守る台があった。
- ・そして遠く離れたスリランカが対日賠償請求権の放棄と言っている。

以下はHPからの引用：

対日賠償請求権の放棄 J.R.Jayawardane : 在スリランカ日本大使館HPより

故ジャヤワルダナ元大統領は、1951年のサンフランシスコ講和会議にセイロン代表(当時蔵相)として出席し、「憎悪は憎悪によって止むことなく、愛によって止む

(hatred ceases not by hatred, but by love) という仏陀の言葉を引用し、対日賠償請求権の放棄を明らかにするとともに、わが国を国際社会の一員として受け入れるよう訴える演説を行いました。この演説は、当時わが国に対し厳しい制裁処置を求めていた一部の戦勝国をも動かしたとも言われ、その後のわが国の国際社会復帰への道につながるひとつの象徴的出来事として記憶されています。

Gangaramaya temple : ガンガラマヤ仏教寺院



ガンガラーマ寺院

市内で最も訪問者の多い寺院であるガンガラーマ寺院は、1885年、植民地支配下であり仏教と文化の復興が切望されていた時期に、設立されました。

スリランカ、タイ、インド、中国の建築的特徴を取り入れた、精巧に作られた建物です。豊富な寺院内の仏像は、アジア各国の仏像を集めたものです。日本からの仏像もあります。



紅茶大国スリランカと日本の特別な関係

1951年、サンフランシスコ講和会議。公式には1945年に終わった第2次世界大戦でしたが、その後、ソ連の台頭、中国の分割等があって混乱が続き、アジアの戦後秩序形成は、このサンフランシスコ講和会議が最大の機会と見なされていました。

当時、日本政府は戦勝国からの巨額賠償金請求や米・英・ソ・中に依る4分割統治プラン等に脅えていました。「青森から函館に渡るのにビザが必要になるかも知れない」。ところが、会議の冒頭、演壇に立った（当時）セイロン代表 J.R.ジャヤワルダナ氏の演説で、会議の雰囲気が一変し、敗戦国日本を穏便に扱い、平和で力強い「仲間」にしようということになったのです。



J.R.ジャヤワルダナ氏の演説：1951年9月4日（サンフランシスコ講和会議）

日本を救った「ジャヤワルダナ演説」の抄訳。

「私は東京を經由してサンフランシスコに來ました。東京で敗戦後の辛く苦しい民衆の生活を見ました。彼等は規則を守り、貧しいながらも毎日団結して希望に向って努力していました。彼等の性は善であることを理解するべきです。

我が国も大戦中、被害を受けなかった訳ではありませんが、私は日本に対して我が国が有する損害賠償請求権をここに放棄することを表明します。

仏陀が言われたように、憎しみに対して憎しみを返せば戦いは終らないものです。憎しみに対し、私達は愛と寛容を持つべきであります」。

殆んど日本人はこんな演説の存在など知りません。なにしろ昭和26年のことです。TVもない、ラジオだって全家庭で聴けた訳ではありません。日本政府はアメリカに対応するのに精一杯で、当時の新聞にも目立った記事は掲載されなかったようです。つまり、日本人はその事実を知らずにひとつの演説によって助けられたのです（勿論、外交は複雑なので、その他のファクターも在ったことは、少し調べれば分かります）。J.R.ジャヤワルダナ氏とスリランカ国民に感謝の意を表します。

2014年9月、当時の安倍晋三首相はスリランカを訪問し、国会議事堂でJ.R.ジャヤワルダナ元首相とスリランカ国民に感謝の意を表す演説をしました。



○日本を分割占領から救った、スリランカ代表の「愛」の演説： HP より
1951年に開かれた、日本の運命を左右する「サンフランシスコ講和会議」。その席上、日本を分割占領から救ってくれたのが、当時スリランカ代表を務めていたジャヤワルダナ氏でした。なぜスリランカは日本を擁護してくれたのでしょうか。

○日本とスリランカの間には、互いに助け合った長い友好の歴史がある
1951（昭和26）年9月6日、スリランカ代表のJ・R・ジャヤワルダナの演説が始まった。舞台は米国サンフランシスコ講和会議である。

51カ国からの代表が集まって、日本との講和条約を結び、日本の独立を認めるかどうかを議論する場であった。米国が中心となって、日本の独立を認める講和条約案がまとめられていたが、ソ連は日本の主権を制限する対案を提出し、さらに中国共産党の出席を求めたりして、審議引き延ばしを図っていた。

「アジアの諸国、セイロン（注:スリランカ）、インド及びパキスタンの日本に対する態度を活気づけた主要な理念は日本は自由であるべきであるということです。」
「自由であるべき」とは、日本の占領を解いて、独立を回復させるべき、という意味である。



○「アジア隷従人民が日本に対して抱いていた高い尊敬のため」

講和条約への賛成を表明した後、ジャヤワルダナ代表はその理由を述べた。

「アジアの諸国民が日本の占領を解いて、独立を回復させるべき、としているのは、アジアの諸国民の中で日本だけが強力であり日本を保護者にして盟友として見上げていた時に、アジア隷従人民が日本に対して抱いていた高い尊敬のためであります。」

「共栄のスローガン」とは、日本が大戦中に唱えた「大東亜共栄圏」のことであり、実際に欧米諸国の植民地支配からの独立を目指す国々の代表が東京に集まって、「大東亜会議」が開催されている。

さらにビルマ、インド、インドネシアでは、日本が支援して設立された独立軍が、これらの国々の独立戦争に大きな役割を果たした。

ジャヤワルダナ代表は、日本に対する賠償請求権を放棄する、と続け、その理由として、仏陀の「憎悪は憎悪によって消え去るものではなく、ただ愛によってのみ消え去るものである」を引いた。

ジャヤワルダナの演説が終わると、賞賛の声の嵐で会場の窓のガラスが割れるほどであったと『サンフランシスコ・ニュース』は報じている。また『サンフランシスコ・エグザミネー』紙は「褐色のハンサムな外交官が、セイロン島よりやって来て、世に忘れ去られようとしていた国家間の礼節と寛容を声高く説き、鋭い理論でソ連の策略を打ち破った」と評した。

この後、ソ連、ポーランド、チェコスロバキアを除く 49 カ国が講和条約に署名し、翌年 4 月 28 日、日本はついに独立を回復したのだった。



○西洋の植民地支配 400 年

スリランカはインド洋交易の重要拠点であり、そのため、早くから西洋諸国の侵略に

さらされた。1505年にポルトガル人がやってきて、約150年間、沿岸部を支配した。1658年からは今度はオランダが替わって約140年間、植民地支配を続けた。さらに1796年にはイギリスが支配者となり、全島を支配下においた。

イギリスは、スリランカ全島を紅茶の生産基地とし、米まで輸入しなければならない状態にしてしまった。独立を求めて大規模な反乱が3度起きたが、いずれも武力鎮圧された。

イギリスは南インドから移住してきた少数派のタミル人を優遇し、彼等を教育して役人とし、多数派のシンハラ人を治めさせた。この巧みな分割統治が、現在も続く民族闘争の原因となった。

同時にキリスト教徒を優遇し、仏教を抑圧した。シンハラ人のほとんどは仏教徒で、教育を受けることも難しかった。



○皇太子のお召し艦を一目見ようと胸を弾ませて港に赴いた少年

1921（大正10）年3月、日本の巡洋艦「香取」がスリランカを訪れた。当時、皇太子であった昭和天皇をお乗せして、ヨーロッパに向かう途上であった。

ジャヤワルダナは、昭和54（1979）年、国賓として来日した際に、宮中の歓迎晩餐会にて次のように語っている。

「外国の統治の下では、人々の信仰や言葉、慣習などはほとんど消え去りそうになっていました。

このことから、私達だけではなく、西欧の帝国主義の下で同じような運命によって苦しんでいる全てのアジアの国民達は日本を称賛し、尊敬していたのです。先の80年の間、日本はアジアにおいて独立国として立ち上がっていたのです。

西欧の列強が、その軍事力と貿易力によって世界を支配していた時に、あなた達は彼等と競い、匹敵し、時には打ち負かしていました。

当時の日本は、日英同盟のもと、第1次大戦をイギリスと共に戦って勝利し、世界の

強国として頭角を現しつつあった。自分たちと同じアジア民族で、かつ共に仏教を信奉する日本の皇太子が、自国の巡洋艦で対等の同盟国であるイギリスに赴くという出来事は、「自分たちもいつかは独立を」という希望をスリランカの人々に抱かせたに違いない。



○インドとスリランカにいる兄弟・姉妹に呼びかけます」

1942年の初め、強力な日本海軍はインド洋上の敵艦をどんどんと破壊していき、スリランカ島に向かっていきました。…

4月、日本海軍の航空隊はスリランカの都市を空襲し、英国軍艦に攻撃をしかけてきました。この航空隊は真珠湾攻撃に参加した後やって来た隊でした。」

○「私達は日本に、このことを感謝しなければなりません」

日本が敗戦した日は「Victory over Japan Day（対日勝利の日）」と呼ばれ、大きな都市では記念式典が開かれた。イギリス側代表の後で、スリランカ側代表が演説を行った。

「この日は、私達が日本に対する勝利を祝うものです。しかし、私達は日本によって得られたものがあります。それは愛国心という心でした。それは、日本によって全てのアジアの国々にもたらされたのでした。

戦争によってアジアの国々、インドネシアやインド、スリランカ、ビルマなどは自らに対する自信と民族主義の意識を得たのです。私達は日本に、このことを感謝しなければなりません。」

「対日勝利の日」に、英国側の前で、日本に感謝する演説を行ったのである。

1948年2月4日、スリランカは独立を果たした。またインドは独立を勝ち得た。それとともに、イギリスはスリランカからも撤退したのである。

そしてサンフランシスコ講和会議で日本を擁護する演説をすることになる。

日本は明治以降、スリランカの人々の独立への希望に灯を点してきたのだが、今度はそのスリランカが日本の独立を助けてくれたのである。